高校生の主体的な進路選択をサポートする先生のための

Career Guidance

キャリアガイダンス

2010|12 No.34

シリーズ『ニッポンの人材〜育成と就業の現場』vol.15

福祉・介護を仕事にする

学校外のキャリア教育プログラム

映画監督 松井久子が語る「希望」

キャリア教育先進事例

大阪・大手前高校／長崎・島原農業高校

ネット・コミュニケーション事例

東京・白梅学園清修中高一貫部／愛知・聖カピタニオ女子高校／兵庫・明石北高校／兵庫・伊丹市立伊丹高校

リサイクル
この本は
リサイクルできます

RECRUIT

1章 福祉・介護の現場は今

赤ちゃんからお年寄りまで、福祉・介護の問題はとても幅広く、注目度も高いため、毎日何かしらのニュースを目にします。それで表面的な事情はわかっても、業界全体がどんな方向に向かっているのか、制度や仕事がどう変化しているのかはわかりません。ここでは様々な専門家や当事者へのヒアリング、また様々なデータを用いて、この業界の「今」と「これから」をレポートします。

取材・文／荒尾貴正（本誌編集デスク）　撮影／中岡邦夫

I 介護福祉の現場は今

ようやく介護の現場に、かすかに明るい兆しが見えてきた――。そうささやかれ始めたのは昨年からだ。介護の世界にどのような変化が起こり始めているのだろうか。

介護保険制度がスタートしたのは2000年。少子高齢化が進み、福祉の充実が望まれる一方、国家財政は逼迫し、行政サービスだけではこの国の将来は立ち行かない。そう考えた時の政府は、福祉サービスに民間業者を参入させることを決めた。それが介護保険制度誕生の背景である。

介護保険制度とは40歳以上の人全員が保険料を納め、介護が必要と認定された場合に費用の一部を支払って介護サービスを利用する制度。この制度では介護報酬（介護サービス事業者に支払われる報酬）が3年おきに改定されている。第1回（03年）、第2回（06年）とたて続けにマイナス改定となって報酬が下げられ、事業者は大きな打撃を受けた。07年6月、介護サービス最大手コムスンが介護報酬の不正請求などで介護事業から撤退。この「コムスン・ショック」で明らかになったのは、介護現場の過酷な労働条件や深刻な人手不足、経営危機に瀕する多くの事業者の実態だった。

そうした現状を受け、09年の第3回は3%アップという初めてのプラス改定に。さらに10年より介護職員1人当たり月額1万500円を国が交付する「介護職員処遇改善交付金」もスタート。これらにより待遇は変わった。介護業界最大の組合員を擁する日本介護クラフトユニオンの調査によれば、09年8月と10年8月の賃金を比較すると平均1万4217円の増額があったという（図1）。

「改善は見られますが、まだまだ満足には程遠いと皆さん言っています。本ユニオンとしても介護従事者が希望と誇りをもって働くための賃金は『全産業平均以下であってはならない』と考えており、『常勤者は年収450万円以上、非常勤者は時給1800円以上』の実現を目指し厚生労働省に働きかけています。政権が変わり、国も真剣に待遇改善に取り組み始めました。その動きに私たちも期待しています」（日本介護クラフトユニオン陶山浩三副会長）

このところ介護従事者を養成する学校にも変化が見られる。学校基本調査によれば、今春の高校新卒者のうち専門学校進学者は15・9%。前年度比1・2ポイント増で6年ぶりの上昇だ。「就職に有利」とされる点が見直されているようだが、分野として介護福祉が24%増、社会福祉が8%増と福祉系の伸びが著しい。不況時に学生は「安定志向」、「実学志向」になるといわれる。福祉系がそうした選択肢のひとつになったということだろうか。

「ありがとう」があふれるぜいたくな仕事

介護事業所にも新しい風が吹き始めている。やりがいをもって働き、十分な収入も得られ、質の高いサービスを提供する。理想の職場づくりを模索する動きがある。

東京都武蔵野市など都内5カ所でデイサービス事業を行う株式会社はっぴーライフの辻川泰史社長は、有料老人ホームなどに勤務後、02年に24歳で起業した。

同社のホームページにはスタッフや利用者の写真があふれ、動画やスタッフのブログを見ると、どんな雰囲気で働くのかがイメージできる。これを見て毎月約20人の応募があるという。応募者が多いから優れた人が採用でき、社長が率先してトレーニングする。人が育ち、効率的で質の高い仕事ができるようになる。そして会社の業績が上がる。従業員の給与が上がり、家を買うスタッフも出てくる。職場の雰囲気がよくなるから、また人が集まってくる――そういう循環ができあがってきたという。

「福祉はお金じゃないと言われ、利益追求はタブーという考え方が依然としてあります。しかし介護職だっておいしいものを食べたいし、旅行にも行きたいし、家ももちたい。以前勤めていた老人ホームも、たくさんの『やりがい』がありましたが、将来に『希望』のもてないスタッフが数多くいました。こういう業界を何とか変えたいという思いで独立しました」(辻川社長)

その思いの根底にあるのは、介護の仕事に対する強い「誇り」だ。「ありがとう」の言葉をこれほどたくさんかけてもらえる職場はおそらくないという。利用者と真剣に向き合えば、学べることはふんだんにある。元政治家、元社長といえども年老いれば失禁もするし、徘徊もする。部屋で人知れず亡くなる人もいる。こんな死に方はしたくないと思うこともあるし、こんな死に方ができたらいいと思うこともある。ならば今、自分はどう生きるべきか――そんなことを考えさせられる機会に満ちた職場でもあるという。

「すごくぜいたくな仕事だと私は思っています。文化の継承という意味からも、外国人に任せるのはもったいない。こんなにいい仕事はないですから、ぜひ日本で生まれ育った人についてもらいたいですね」(辻川社長)

介護保険制度が開始されて10年経ち、この会社のようにこれまでの古い考え方を打破すべく、各々の特色を生かした経営を行う事業者も登場している。これから目指す若者にとって、選択肢は増えている。

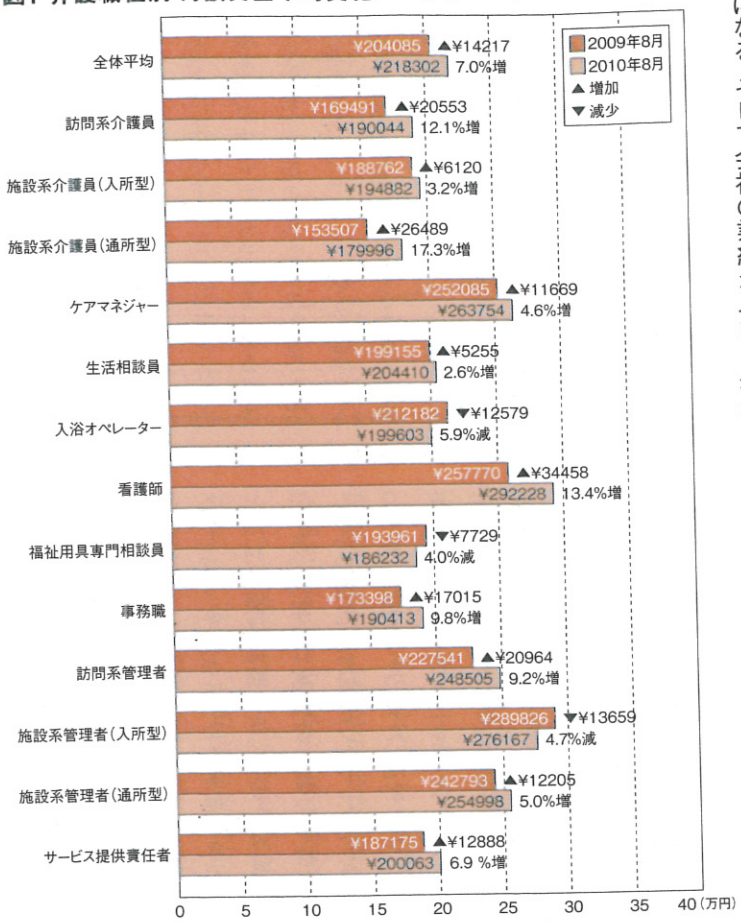
「終の棲家」をどんな若者に託すべきか

ここまでの話は介護福祉のひとつの側面ではあるが、都市に限られた話かもしれない。社会福祉学者として全国を訪れ、現地調査や実践研究を行っている武蔵野大学大学院 川村匡由教授は次のように語る。

「福祉サービスは、大都市ではかなり整備が進んでいますが、地方はますます疲弊している。医療と同じような現象が介護でも起こっています」

「老老介護」という言葉がかつて言われた。老人が老人を介護するということだが、今それがもっと進み、「認認介護」という問題が指摘され始めた。高齢夫婦の双方が認

図1 介護職種別 月額賃金平均変化(2009年8月と2010年8月の比較)



出典:日本介護クラフトユニオン 2010処遇改善調査報告書より(データは月給制組合員のもの)

株式会社はっぴーライフ 社長 辻川泰史氏